

The Loveliest Castle in the World

リーズ城を征く



●征くシリーズ●取材・執筆・写真／本誌編集部

世界で最も美しい城

一五二〇年五月二十一日、きらびやかな装束に身を包んだイングランド国王ヘンリー八世は約四千人の従者をして、グリンニッジを出発した。目的地はフランスのカレー近郊の太平洋原であり、そこでフランス国王フランソワ一世との会見の場が持たれていた。歴史上「金欄の陣」と呼ばれる出来事である。王妃キャサリンも千人以上の行列を従えて後に続き、このふたつの大行列は、ドーバー海峡への途上にあるリーズ城で一時歩を休めた。

城は、ヘンリー八世が王妃キャサリンのため、当時の強国フランスのどの城にも引けをとらないよう大規模な拡張工事を施しており、五千人近くの兵士や従者が城周辺の敷地を埋め尽くす光景は圧巻だったに違いない。イングランドがいかにも壮大で洗練されているかをフランスに見せつけるためにはどうすべきか――、湖面に映るリーズ城を眺めながらヘンリー八世が考えたかどうかは定かでないが、世紀の一瞬ともいえる会見の足がかりとしてリーズ城は最適の場所といえた。

英仏の親睦を深めるという名目の「金欄の陣」であったが、実際にはフ

ランス侵攻を目論んでいたヘンリー八世にとって、ドーバー海峡に近いリーズ城は対フランスへの前線の一部といえ、攻撃、防衛の点からも十分な条件を備えた重要な軍拠点であった。そのためか、ヘンリー八世がリーズ城を居住とするのはなく、フランス侵攻が失敗に終わり、大陸で唯一のイングランド領であったカレーを失うと、その存在価値も一気に下がり、王はこれを側近に譲り渡している。こうして、三百年にわたって王族の手を渡ってきた城の歴史にはピリオドが打たれた。

リーズ城の起源は九世紀に遡り、もともとはノルマン征服以前のサクソン人が所有していたものだった。一〇九〇年、ウィリアム二世がヘイスティンガスの戦いで功績を称え、従弟であるノルマン貴族に与え、十二世紀になって石造りに建てかえられた。王族の所有となったのは十三世紀のエドワード一世の治世で、王妃エレナーに献上され、王宮となった。その後、エドワード一世の後妻のマーガレット王妃に寡婦産（未亡人が相続する夫の財産）として譲渡されたからは、未亡人となった王妃が所有権を持つという慣習が始まり、エドワード二世のイザベラ王妃、リチャード二世のアン・オブ・

ボヘミア王妃、ヘンリー四世のジョーン・オブ・ナヴァール王妃、ヘンリー五世のキャサリン・オブ・ヴァロア王妃などが所有および居住したため、貴婦人の館の異名を持つ。これら王妃のうち三人がフランスの王女だったため、フランス王室らしい室内装飾が施されるなど、中世を通して優雅さと気品に満ちた城だったことが伝えられている。

「ヨーロッパの名城はそれぞれに壮麗で美しい。テムズに映えるウィンザー城、川辺に建つウォリック城やカナードウ城、海辺のコンウェイ城やカナードウ城、ロワールのアンボワーズ城、水際のエグ・モルト城、カルカソンヌ城、クレーン城、ファレーズ城、ガイヤール城。どれも美しく、賞賛に値する。しかし、シダが黄金色に染まり、かすかに青い霧が木々にたなびく秋の宵、湖水に抱かれて建つリーズ城の美しさにはかなわない。その眺めはこの世で最も美しい」

かつて古城研究家のコンウェイ卿（一六七九―一七三二年）はリーズ城をこのように描写した。これが所以となり、今もリーズ城は「The Loveliest Castle in the World」世界で最も美しい城」という惹句で語られている。実

際リーズ城を訪れると、世界一と言いつつしてしまうのは大袈裟な感もあるのだが、ヘンリー八世が行った大改築後のリーズ城は、確かにヨーロッパ随一の名城であったに違いない。ただ、その当時の名城の大部分は失われる運命をたどった。

城を救った莫大な遺産

十六世紀に王族の手を離れた後のリーズ城は、二十世紀に至るまで貴族階級である城主の手を渡っていくのだが、城には常に維持費と相続費の問題が付きまとい続けた。城主の多くは資産家であったものの、その莫大な費用に売却や譲渡を余儀なくされ、その度に城内の資産が売りさばられることも少なくなかった。

一九二〇年代に入ってから、リーズ城は重い相続税を理由に売りに出され、買手が二年以上もつかないまま、放置されていた。二五年に、米紙『ニューヨーク・ワールド』の発行者、ウィリアム・ランドルフ・ハーストが下見を行っているものの、住居として堪えうる状態に修復するのに当時の通貨価値で最低約四千ポンド（現十四万ポンド）約二千万円強）かかるかと査定

世界各国どこでも

「インターネット ジャーニー」

どこにいたって、お読みいただけます。

月～金曜毎日更新

www.japanjournals.com

個人ブログ
大募集!!

あなたのブログを
ジャーニーのホームページに
リンクしませんか？

現在、インターネット・ジャーニーへのアクセス数は月平均約11万。
あなたが発信している英国での生活に関するブログを、
今よりちょっぴり多くの方にご覧いただくためのお手伝いができるかもしれません。
営利を目的としない個人のブログであれば、リンクはもちろん無料です。
お申し込みはインターネット・ジャーニー「個人ブログの部屋」をご覧ください。

※掲載にあたり、事前に一定の審査をさせていただきます。内容によってはリンクをお断りしなければならない場合もございます。予めご了承ください。

インターネット・ジャーニー

www.japanjournals.com





リース城で開催される会議やイベントの参加者のために提供される寝室。21室あり、写真は新城にある「胡桃(クルミ)の部屋」



城内最大の「ヘンリー8世の宴会場」。『金襴の陣』を描いた絵画が掛けられ、ラトローによる漆黒の黒檀の床や見事な彫りの施された天井の張りなど、中世の趣が深い部屋。



1920年代らしいデザインの良い靴の数々が収納された靴箱
ベイリー夫人が少女時代に身につけていたドレス
トレードマークとなっているパイプを手にしたベイリー夫人。1931年撮影。



ブーダンがデザインしたベイリー夫人の寝室。鳥好き彼女のために、随所に鴨や鷹など、中国の赤絵による置物が配されている。ブルーの色調が静謐さを漂わせる。

され、やむなく手を引いている。

時代が変われば変わるほど、城の存続は厳しさを増すばかりで、城は、英国中に散在する廃墟の城と同様、ただただ風化していくのを待つばかりに見えた。

そこに救世主のごとく現れたのがオリヴ・セシリア・パジェット夫人。後に「ベイリー夫人」としてリース城の歴史に欠かせない存在となる人物だ。

オリヴが初めてリース城を訪れたのは一九二六年。三歳と六歳になる娘二人と、再婚したばかりの夫アーサーと新生活を始め直後の頃だった。アーサーはリース城のあるメイドストーン周辺の土地を相続しており、それがオリヴとリース城を引き合わせるきっかけとなった。由緒ある古城を住まいにするというアイディアは、当時のブルジョアのステータス・シンボルでもあり、この夫婦も多分に漏れず、リース城に目をつけていたのである。

リース城をひと目見たときからその壮麗さに心奪われていたオリヴは、二六年来にリース城を十八万ポンド(現六百三十万ポンド)約九億五千万円)で購入。城全体の修復には十億ポンド(現三百五十万ポンド)約五億三千万円)が必要と推定されていたが、彼女はその値をいともつけなかった。

新聞王ハーストでさえ手を出さなかった曰くつききの物件を若年二十五六歳の若妻が射止めることができたのは、彼女の類まれな蓄えによるところが大きい。

オリヴは、大英帝国一等勳士(GBE)を受勲し、優れた実業家として知られる英国人の父アルリックと、米国の大財閥ホイットニー家の祖を築いたウィリアム・ホイットニーの令嬢ポリーリンとの間に、一八九九年アメ

フランス仕込みの もてなしの達人

ウィンストン・チャーチルの義理の娘であり、数々の不倫騒動を起こしたことで名高いパメラ・チャーチル・ハリマンは、ベイリー夫人の娘と同級生であり城の常連客で、後に著作の中でこのように記している。

「その当時の行儀の悪いゲストたちと比べると彼女(ベイリー夫人)はきわめて節度があるタイプで、口が堅く、控えめな方だった。財産家の男性たちに媚びなくとも、彼らをとりにする媚薬のような特別な力を持っていた」

彼女がことのほかメディアに取り沙汰されることを嫌ったため、彼女のとなりを今に伝える記述や写真は皆無に近いが、出しゃばったところがなく聞き上手な彼女は、会話がとぎれたり、退屈になり始めたりすると適当な話題で盛り上げ、ゲストたちは心地よく寛ぐことができ、彼女を「もてなしの達人」と誉めそやしたという。

一方、美人で身のこなしが優雅だが、同時に人を寄せ付けない威厳のようなものをもち合わせており、時に人を萎縮させるような高圧的な態度にでることもあった。きわめて几帳面で、日記をかかさず付け、サロンの誰が来て、何を食べ、いつ帰ったかなどを記録し、出費に関しても細かく従事に報告させていたという。

パーティーの達人でありながら、同時に人見知りも激しく、気難しい面のあるベイリー夫人を公私ともに支えたのが、大蔵政務次官であったデイヴィッド・マーティンソン David Margesson と、政務秘書官であり、



30人程度の食事が可能なダイニングルーム。こちらもブーダンのデザインで、マントルピースの上には夫人が集めた中国製磁器が飾られている。

アルリックは八一年にアメリカに移住し、ポリーリンの母方の伯父らとともに石炭会社や鉄鋼会社の設立に参加。八五年に結婚し、一九〇一年、オリヴが生まれてからも英国に帰国してはいる。もともと裕福な家庭に育ったオリヴだが、その後も財運の女神に終始守られ、求めずとも豊かな富が流れ込んでくるような一生を送った。

というもオリヴは、一九一六年に母が亡くなった際、とてつもなく莫大な遺産を譲り受けたからでなく、この遺産は単に母のものだけでなく、母が亡くなる直前に父方の伯父から譲り受けていた財産も含まれていた。この伯父は世界最大ともいわれる石油会社の創設者で、アメリカの長者番付に常に名を連ねるほどの資産家だった。彼は子供に財産を託し、その四百万ポンド(現億ドル)約九十四億ポンド)ともいわれる遺産がポリーリンの死により、そっくりそのまま娘のオリヴとその妹ドロシーに二分されたのだ。

こうして、オリヴは当時英国で最も富裕な人となら、生涯にわたり、労働により生計を立てる必要などな

後に情報相や文部大臣を務めるジェフリー・ロイド Geoffrey Lloyd であつた。ベイリー卿とは、息子を産んでまもなくすれ違い生活となっており、ベイリー夫人は相談事はすべて、この二人に持ちかけた。彼らも家族のように彼女を支えた。

また、この頃からリース城の内装を手がけ始めたフランス人室内装飾家のステファン・ブーダン Stephane Boudin とも強い信頼で結ばれ、城をより美しくするための「共同作業」は、三十年にも及んだ。

ブーダンは、豪奢なルイ十四世・ルイ十六世スタイルなどで知られる家具メーカー、メゾン・ジャンセンのオーナーであり、ホワイト・ハウスの内装を手がけたことで有名な、当時のインテリア界の大御所であった。ともに完璧主義の二人は意気投合し、各々の部屋の装飾などが吟味され、さらに各々の部屋が全体として調和を奏するよう計算し尽くされた。

美術品の蒐集は以前より趣味としていたが、これ以降は、どの階のどの部屋のどこという明確な配置を念頭に置いていたという「宝探し」が始まったのである。アンティーク家具、絵画、タペストリー、陶磁器など、ヨーロッパ中を探し回り、値段交渉術なども身につけ、ベイリー夫人は「手ごわいバイヤー」としても名を広めていく。

「メシヤム・パイプ」がトレードマークとなるほど喫煙愛好家だったベイリー夫人は、第二次世界大戦後、呼吸器を患い、体力も

く、あり余る資産のもと悠々自適に過ごした。そして、自分の愛するもののために際限なく、その資産を注ぎ込んだのである。リース城の修復とリースキャッスル財団の設立による城の永久保存――、四十年に及ぶそのプロジェクトが、彼女が夢中になれるものであり、生きがいとなったのだ。

念願の古城を手にしたオリヴは、自らの審美眼を試す絶好のチャンスを得て心躍らせたに違いない。自分好みの「マイホーム」になるよう、修復にあたってはさまざまな設計案、改築案を積極的に出したという。

若かりし頃にフランスで教育を受け、フランス文化に精通していた彼女は、当時国際的に活躍していたパリの建築デザイナーであり、室内装飾家のアルマン・アルベル・ラトール Armand-Albert Rateau をこの大修復の監役に起用する。ラトールはフランスのファッショナブルブランド「ランパン」を設立したジャンヌ・ランパンと親交が深く、ランパンの私邸の装飾や、ランパンが愛娘のために作ったという香水「アルページュ」のボトルデザインでも知られる。一九二〇年代当時粋で上品な文化の発信地といえは未だパリで、パリのトップデザイナーを起用することは「二流のしるしでもあったのだ」。

こうして、長く放置され幽霊屋敷と化していたリース城は、中世に漂わせたままフランスらしい優雅さを蘇らせた息を吹き返していく。基礎構造から改築され、中世の国王や王妃の居住であったグリニエ(東屋)も補修され、一九二八年六月(東屋)も補修された。オリヴは娘二人は大方の工事が終了した。オリヴには二人と妹のドロシーと、城での生活をスタートさせ、娘たちはポニーに乗って駆けたり、堀で泳いだりと、ロンドンにある邸宅とは桁違いののびのびとした生活を享受した。

「ソープ・ホール」の部屋」と呼ばれる、重厚な大理石製のソープ・ホール。イタリヤ大理のソープ・ホールにふれた部屋。イタリヤ大理のソープ・ホールにふれた部屋。イタリヤ大理のソープ・ホールにふれた部屋。



「ソープ・ホール」の部屋」と呼ばれる、重厚な大理石製のソープ・ホール。イタリヤ大理のソープ・ホールにふれた部屋。イタリヤ大理のソープ・ホールにふれた部屋。

城よ、永遠に

城よ、永遠に

城よ、永遠に

城よ、永遠に

城よ、永遠に

城よ、永遠に

城よ、永遠に

城よ、永遠に

城よ、永遠に



リース城のシンボル「黒鳥」は、ベイリー夫人により初めてイングランドに持ち込まれた。

城では、第二次大戦時にはロイドの管轄のもと、秘密裏に「石油軍事省」が組織され、兵器や安全システム開発の場となり、また軍病院としても機能した。ベイリー夫人はそのように城を、過去の遺産としてただ観賞されるだけでなく、実際に使われ、「活きた場」となるよう次世代に遺したいと思っていた。そのためにはナショナル・トラストに寄贈するのではなく、独自に非営利財団を設立し、開放する必要がある。こうして財団の設立準備が進められ、同時に庭園や鴨池などの整備など、城の一般公開に向けたさらなる改築が行われた。

財団設立を間近に迎えた約二十年後の一九七四年夏、七十五歳のベイリー夫人は、ロイドに付き添われ南仏への療養に出かけていた。この頃のベイリー夫人は酸素マスクをあてがわれ車椅子で移動という瀕死に近い状態であった。そしてロンドンに戻ってまもない九月九日、リース城を訪れることなくして逝ってしまう。

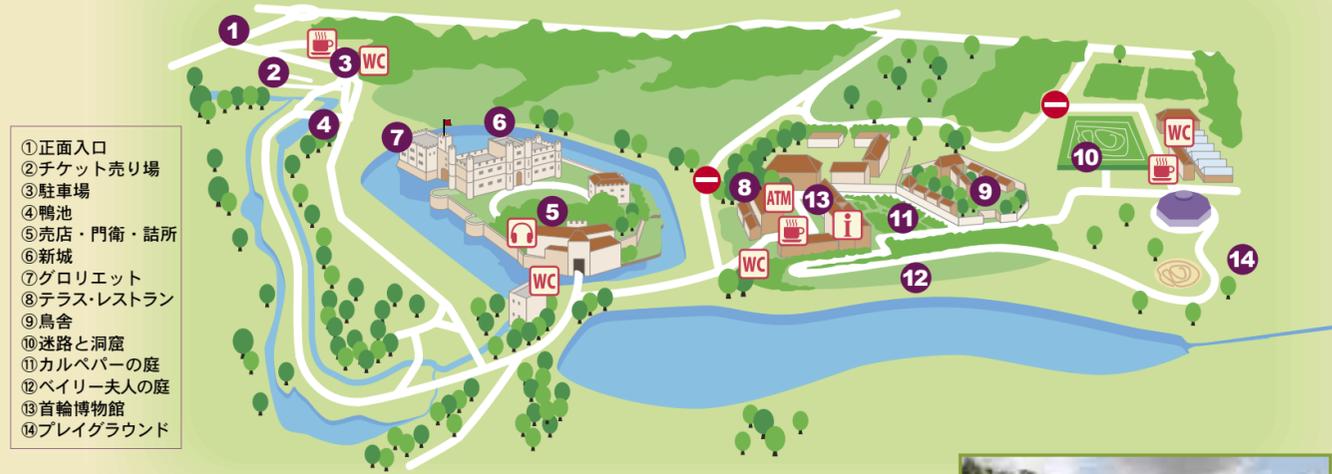
免れ、相続税五十万ポンドを支払うのみで済んだ。彼女の遺産四百四十万ポンドと有志からの寄付金四百四十万ポンド、ロンドンの私邸やバハマの別荘、家財などの売却から捻出された四十万ポンドも補填され、それらが財団の資金となった。

同年、早々に庭園が一般公開され、翌年には城も含めた開放がなされた。同時に企業によるセミナーや講演会会場としても頻りに利用され、「快適な場」としての評判を高めていったリース城は、七七年、その安全性と機能性が評価され、G7財務相会合の会場として選ばれ、翌年には中東和平会議も行われている。国際的な医学セミナーや芸術・文化イベント、さらには世界各国の首脳たちによる会談の場になれば、というベイリー夫人の夢がかなえられたのである。

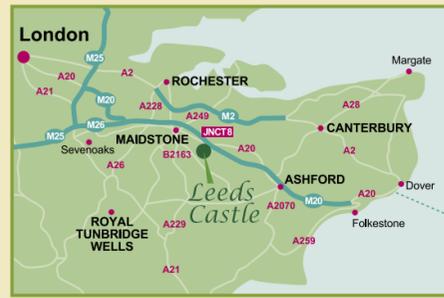
リース城が、類まれな財産家であり、優れた審美眼を備えたベイリー夫人と、いつの日か見初められた、蘇ったこととをきわめて幸運なことだったといえよう。これにより、城は王宮だった中世の頃の品格と威厳を恒久的に持ち続けることができたのだ。

歴代の城主の誰よりも長く城に住み、エドワード三世やヘンリー八世に匹敵する国王級の大改築を城に施したベイリー夫人。メディアに取り上げられ、世間の注目を浴びることを頑なに拒んでいた彼女ではあるが、その誇るべき功績に光をあてずにはいられない。

こうして、長く放置され幽霊屋敷と化していたリース城は、中世に漂わせたままフランスらしい優雅さを蘇らせた息を吹き返していく。基礎構造から改築され、中世の国王や王妃の居住であったグリニエ(東屋)も補修された。オリヴは娘二人は大方の工事が終了した。オリヴには二人と妹のドロシーと、城での生活をスタートさせ、娘たちはポニーに乗って駆けたり、堀で泳いだりと、ロンドンにある邸宅とは桁違いののびのびとした生活を享受した。



- ① 正面入口
- ② チケット売り場
- ③ 駐車場
- ④ 鴨池
- ⑤ 売店・門衛・詰所
- ⑥ 新城
- ⑦ グロリエット
- ⑧ テラス・レストラン
- ⑨ 鳥舎
- ⑩ 迷路と洞窟
- ⑪ カルペパーの庭
- ⑫ ベイリー夫人の庭
- ⑬ 首輪博物館
- ⑭ プレイグラウンド



Leeds Castle, Maidstone, ME17 1PL
Tel. 01622 765 400
www.leeds-castle.com

オープン時間 (2010年3月31日までの時間帯)
 城 午前10時半～午後4時 (入場は午後3時半まで)
 ガーデン 午前10時～午後5時 (チケット販売は午後3時まで)
 入場料 (城、ガーデン含む) 大人 £16.50
 子供 (4-15歳) £9.50
 学生 £13.50

ゴルフコース (9ホール、パー33、2681ヤード)
 9ホール料金: 平日: 大人 £9、シニア・ジュニア £7.50
 週末・祝日: 大人・シニア £12、ジュニア £7.50
 18ホール料金: 平日: 大人 £16.50、シニア・ジュニア £14
 週末・祝日: 大人・シニア £19.50、ジュニア £14
エアバルーン (気球)
 料金: 平日の午前 £89、平日の午後 £135、
 時間指定なし (週末を含む) £150

アクセス
 電車
 ヴィクトリア駅から Ashford 方面行きで Bearsted 駅下車。所要時間約1時間。その後はシャトルバスで約10分ほど。
 車
 ロンドンからは所要時間約1時間、M20でジャンクション8下車。



2400本の樺(いちい)の木を植えて作られた迷路。中央には全体を一望できる小高い丘があり、出口を見つける手がかりになる。なかなか手ごわいので帰りの時間が迫っているときなどは入らないほうが賢明!



地底世界を表現した洞窟。



「Culpeperの庭」は17世紀の城主カルペパー家にちなんで名づけられた。春夏は多様な花々で色づく。



セルフサービスによるレストラン「Fairfax Hall」にはテラスルームがある。定番フィッシュ&チップスやソーセージ&マッシュが楽しめる。レストラン近くの首輪博物館にはヨーロッパから集められた400年に及ぶコレクションが展示されている。こちらはベイリー夫人のコレクションではなく、リース城財団に寄贈されたもの。



子供のためのアスレチック&遊び場。



鴨池には珍鳥を含め、さまざまな水鳥が放し飼いにされて、訪問者の目を楽しませている。



1988年にオープンした鳥舎。鳥をこよなく愛していたベイリー夫人はドイツ、オランダ、ベルギーなどのヨーロッパ諸国はもちろんで、南アフリカ、マダガスカル、オーストラリアまで自身で買い付けに出かけ、100種もの鳥を集めた。エリザベス皇太后がわざわざ見に訪れたというオーストラリア産のインコやオウム、カンムリ鶴などが見られる。



ゴルフ場へはプレーする場合以外入らないこと。ホールが飛んでくる可能性もあり危険。



ジャーニーのクラシファイド・アドなら
お申込みからお支払いまで オンラインでラクラク
掲載料はその場で自動計算
 通常締切に間に合わなかった方のために、
Express, Super Express (追加料金がかかります) もご用意しています。
 詳細・お申込みはこちらをご覧ください。
www.japanjournals.com
 ご利用頂けるカード
 Switch / Maestro / Solo
 Delta / Master / Visa / JCB
 American Express
Japan Journals Ltd
Journey Classified Dept.